

## 五島先生へ 直球質問

昭和医科大学歯学部5年 竹林 李加

Q1 たくさんある歯科分野のなかで、訪問歯科を始めようと思った理由は何ですか。

A 在宅医療をされている医師の先生から相談されたのがきっかけです。当時まだ訪問歯科という領域が少なく正直「何をするのか」と思ったが、やり始めたら大変多くのニーズがありやりがいを感じたため。

Q2 訪問歯科の現場は常に倫理観と隣り合わせだと感じていますが、これから歯科医師になる学生として、患者さんに寄り添える現場に携わっていくには、どのような学びが必要でしょうか。

A 授業や実習ももちろん大事ですが、人間性豊かな生き方をしてきた人こそが訪問歯科に向いていると思う。

Q3 学生の立場で患者さんに寄り添う現場に携わる機会が少なく、今後、どのようにキャリア・仕事を選んでいいのか。



A 自分がやってみたいと思う分野に進めばよい。好きなことであれば深く考えていくし、深く考えしていくことで一步一歩進むことができ、自分が成長できる。

Q4 臨床実習の現場を体験していると、患者さんが痛がったり嫌がったりしてなかなか思うように治療が進まないと感じることがあります。五島先生はどのような工夫やアプローチをされますか。

A 訪問歯科の現場は患者さんの生活の場なので、日常の行動や好きな食べ物など生活する上でのあらゆる面を考慮して治療方法を導き出している。

…> トゥルー ハート  
*True Heart*

NO.6

Dec. 2025



最期まで口から食べることをめざして

～“新宿食支援研究会”を立ち上げ支援活動を実践～

〈訪問歯科診療へ向かう五島先生〉



ご  
寄  
付  
の  
お  
願  
い

公益財団法人 昭和医科大学医療振興財団は、超高齢社会を迎えた今日において、次代を担う情熱ある医学・医療分野の実践者を全国各地から発掘し、顕彰する事業を進めております。

この顕彰事業も今年で12年目を迎え、さらなる事業の拡大を目指すとともに皆様からのご寄付により、優れた医療人を今後も顕彰してまいります。

引き続きご支援いただきますようお願いいたします。

公益財団法人 昭和医科大学医療振興財団

Tel: 03-3783-6731 FAX: 03-3785-7350

Email: igakusinko@ofc.showa-u.ac.jp  
URL: https://showa-mf.jp



公益財団法人  
昭和医科大学医療振興財団  
SHOWA MEDICAL UNIVERSITY MEDICAL FOUNDATION

## 昭和上條医療賞・受賞者探訪



…> 多職種連携による地域食支援の体制構築と実践

| 第4回 昭和上條医療賞受賞者～地域保健医療貢献部門～

新宿食支援研究会代表

五島 朋幸 先生

(ふれあい歯科ごとう代表)

平成21年「新宿食支援研究会」を設立され、地域の高齢者を対象に適切な栄養管理、経口摂取の維持、食を楽しむことを目的とし、医療・介護に関わる多職種や一般市民も含めた130人のメンバー、20以上のワーキンググループで多様な支援活動を実践。地域包括ケアシステムの一つの成功例となっている。

### 【昭和上條医療賞】

地域保健医療の実践および教育の分野において創造的かつ先駆的諸活動を行い、大きな成果をあげた個人またはグループには昭和上條医療賞、またこれらの活動を立ち上げて数年の個人またはグループに対しては昭和上條医療奨励賞を顕彰することとしています。

顕彰対象は全国の病院、診療所、薬局その他の医療関連機関において、地域医療保健活動に携わり国民の健康増進に幅広く貢献している活動を対象とします。

あなたの街の  
医療従事者のご推薦を  
お待ちしています！

Q 昭和上條医療賞の受賞から7年半が経過しました。新宿食支援研究会はどう変化しましたか？

現在も基本的にはあまり変わらないと思います。ただ、オンライン形式のプログラムを取り入れるようになり、再び、盛り上がってきています。例えば、ガムを用いて咀嚼能を確認することを始めました。ただ高齢者は人前でかんだガムを出すことに大変抵抗があり、現在解決策を模索中です。



Q 「食べる権利は生きる権利」というお考えを発しておられますですが、これは「最期まで口から食べることをめざす」という考えにつながるのでしょうか？

その通りです。多くの医療機関では嚥下障害の診断に伴って、禁食となります。これは患者さんの将来にとってベストな選択ではないと信じています。

Q このような考えは医療人の中では変わってきましたか？

まだ変わってないですね。勿論、在宅医療に関わっておられる方には変化があります。市民自らが変化することが重要と思っています。

Q サルコペニアに伴って嚥下障害につながると聞きますが…

誤嚥性肺炎で入院すると、食べられなくなるのは常識になっています。これを克服しなければならない。「安静」は却って不利な状況を生んでしまいます。

Q 「最期まで口から食べることを目指す」という先生のお考えを市民まで広げる活動は、現在はどのような動きになりましたか？

コロナ禍で一度停滞しましたが、その後、復活しつつあります。例えば、タベマチフォーラム（7回目）を通じて市民への食支援サポートをしっかりしておけば良いかなと思っています。

Q 小学生対象に最期まで口から吃ることの大切さを説かれたと聞きましたが、反応は如何でしたか？

社会福祉協議会と連携し、小学3年生対象に行ったところ、大きな関心を持ってくれました。今後もこのような講演も広げていければ将来的には市民レベルに拡大すると思っています。

Q 新宿食支援研究会では、食支援のサポート、例えば「介護食に困った」などの支援をされてますが、具体的にはどのような体制で行っているのでしょうか？

研究会を通じて多職種間で培った情報を元に全身管理、栄養管理、口腔ケアなど専門的な情報提供を行っています。

Q 9月7日に行われた「タベマチフォーラム」でお感じになったことを紹介してください

参加の方の食に対する関心は非常に大きいものがありました。この事が“誤嚥性肺炎=禁食”という流れを市民レベルで変えていく努力をすると大切であると実感しました。市民の意識が変わり、医療人から禁食を言い渡された時点で「何言ってるんですか」といえる状況を作り出したいと思います。

